

CONTENTS

自作自演200 瓦田信幸・川口亜稀子・山下和哉 2

東海とっておきガイド^{⑧7} 静岡編 高橋雅志 3

第5回 だれもが知ってる建築史のはなし
語る 溝口正人 4

全国支部長会議in沖縄 沖縄はもう初夏の陽気 石田 壽 6

JIA三重発 「アーキテクトみえ」発行
建築家の目線から三重を発信! 「アーキテクトみえ 26・27号」..... 相原宏康 7

2015年度「日本建築家協会優秀建築選100作品」 入選された東海支部の皆さん
伊藤恭行・宇野 享・川本敦史・栗原健太郎・降旗範行 8

▶東北からのメッセージ
専門家がしてきたことについて 田中直樹 10

会員のステージ
那古野下町衆と円頓寺・四間道界限..... 齋藤正吉 11

理事会レポート 石田 壽 12

東海支部役員会報告 水野豊秋 13

保存情報 第174回 明眼院旧多宝塔 谷村 茂 14
JR 武豊線 浅井裕雄 14

2016年度東海支部役員選挙についての報告 15

Bulletin Board 15

地域会だより 15

法人協力会通信^{②3} YKK AP(株) 岐阜支店 堀田 茂 16

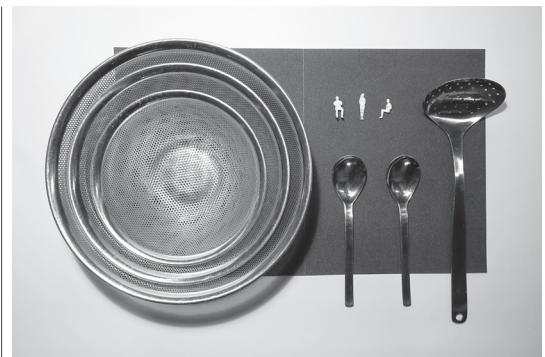
編集後記 川本直義・今井裕夫 16

スケールと幻想
2



牧ヒデアキ
makira DESIGN

今回は金属素材(ステンレス)を中心に組み立てました。建築にとって必要不可欠な金属素材は、家庭用品においても耐久性・衛生上などの理由から多く使われています。撮影に使用した家庭用品は日頃使用していますので当然傷だらけですが、使い始めて13年経過しても変わらぬ価値を持っているように思います。金属素材は世の中に多用されていますが…長い寿命を持つ材質ゆえに長く使われるような配慮が必要な気がします。このことは建築家・デザイナーに問われている部分なのではないでしょうか。



●今回使用した家庭用品
・パンチングストレーナー 3種類(φ193・φ238・φ276)
・スキンマー(穴あきおたま) 1本
・スプーン 2本
・耐水紙ヤスリ #180 229×280 2枚
・1/50人物模型 3体



瓦田 伸幸 (JIA 愛知)

東畑建築事務所 (名古屋市市中村区太閤 3-1-18 TEL 052-459-3621 FAX 052-459-3623)

鉄路の行く末

北陸新幹線が金沢まで延伸し、つい先日は北海道新幹線が開業した。地元名古屋では、リニアの着工に業界は期待をかけている(設計事務所業界まで恩恵が下りてくるのかどうか定かではないが……)。少子高齢化と言われながら、高速交通網のネットワーク化は確実に進んでいる。

幼小時代、撮鉄・鉄道模型を少しかじった私だが、その辺りの話題を聞いていると少し思い出すことがある。まだ小学校高学年の頃だったと思うが、学校から作文の課題が出され「国鉄の優位性」という文章を書いた記憶である。当然、当時は現JRの分割民営化前の話であり、私鉄よりも全国津々浦々まで鉄路で網羅している国鉄の方が利便性が高く、将来性があるという話を書いた気がする。

時代は流れ、子どものころに主張した意見はもろくも崩され、国有鉄道はなくなり、新幹線ネットワークの整備の名のもとに、在来線はどんどん細切れにされ、中小私鉄の生命線である地域への貢献も危うくなりつつあるのが現状である。

JR分割時に各JR会社は仲が悪いのか、各社間で連携を取ろうという動きはなく(実際、JR西日本と東海は新幹線においても在来線においても連絡が悪く、悪意さえ感じると思うのは私だけだろうか?)、JR九州は列車の移動そのものを商品にするという方法で成功している。各社もそれに習い、北斗星やカシオペアがなくなった後も移動そのものを楽しむ企画列車が製造されている。それはそれで楽しみなのだが(七つ星の値段と混み具合から庶民であるわれわれが乗れる日が来るのかは分からないが……)、本来、身近な公共機関のはずの鉄道が本来の姿でなくなりつつあるのが、アナログ人間の私としては少し寂しいと感じている。



川口 亜稀子 (JIA 愛知)

Liv 設計工房 (名古屋市東区徳川1-10-3 名古屋陶磁器会館3階 TEL 052-939-0537 FAX 052-939-0538)

つくった建物、いまどうしていますか?

8年前にデザインしたカフェをオーナーが手放すこととなり、最後の日の夜、惜しむ思いでお店に行くと、常連のお客様が内装そのままカフェを引き継ぎ、半月後のオープンに向けての相談で来店されていました。新しいオーナーに、困ったときは何時でも相談にのる旨を伝え、壊されず延命されることに胸を撫で下ろしました。

設計事務所を始めてから気づけば20年の歳月が経ち、つくってきた建物や店舗も住まい手やオーナーの変化とともに存続の危機に直面する事が出てきました。

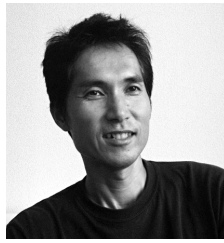
ヘリテージマネージャーとして、魅力ある建物の保存と活用や歴史ある町並みの景観保存に携わる機会が増えたこともあり、建築も寿命があり、産声をあげてから終焉を迎えるまでどのような存在であるかを思い巡らせます。

ただ長く存続することが良いのではなく、人とかかわり、大切にされ、物語が生まれる居場所であってほしい。存在する地域との相性が良いこと、もしくは相乗効果があるなど、人と建築との関係や経過を重ねてみます。

町並みの中の佇まい、営みなど長生きできる魅力のある建物をつくるには、饒舌であるよりも受入れる懐があり、変化に対応できるニュートラルな居場所をつくることと思うものの、20年前からさほど変わっていないつくってきた建物と向き合っているこの頃です。



8年前にデザインしたカフェ



山下 和哉 (JIA三重)

建築デザイン研究所 (三重県津市大谷町254エンデバービル4階 TEL 059-253-6200 FAX 059-253-6201)

小さなサンルーム

小さなサンルームをつくっています。自邸リビングの南側に4帖の増築を自作しています。取り掛かったのは昨年8月、休日の時間を利用して、少しずつ進めています。

コンクリートブロックで外周の基礎を立ち上げ、床面に断熱材を敷き、土間コンクリートを打ちました。そして鉄骨角パイプで柱と梁を溶接してつくりました。そこに木材下地を取り付け、屋根と壁にはポリカーボネードとガルバリウム鋼板の波板を貼りました。出入り口のアルミサッシも取り付けました。内部床仕上げは600角のタイル貼りです。

素人が施工しているのでとても時間がかかります。5本鉄骨柱のうち1本が垂直に立たず、まあいいかと思いつま進めました。ところがその柱に取りつく外壁とサッシが垂直にならず、その下地修正するのに手こずりました。さらに600角タイル貼りも一苦勞。平面的な配置は問題なくできましたが、高さの統一が困難で、先に張ったタイルと、後に張ったタイルのレベルが3mmほど高かったり低かったり。工事現場の職人さんの苦勞はわかっているつもりでしたが、再認識しました。

あとは外部まわりのコーキング打ちと、内部にロールスクリーンを取り付け完成です。ここに気に入った椅子とテーブルを持ち込み、休日の朝からコーヒーを入れ、仕事や読書をするのが夢でした。完成後はその生活を実現しようと考えています。



夢のマイスペース

東海とおきガイド ⑧7 | 静岡編 |

高橋雅志 (一級建築士事務所 高橋設計事務所)



旅館 八百甚

ここ掛川市の横須賀は東西のメイン街道筋からはずれ、江戸中期まで海上運輸の中継地として栄えた城下町である。今でも趣のある造り酒屋、醤油の醸造元、呉服屋、提灯屋が現役で商っている。当時の面影を残すこのまち並みの中ほどに旅館「八百甚」がある。創業は江戸末期、ファサードは昭和初期につくられ日本瓦葺きの重厚な入母屋妻入り。通りを眺める2階の肘掛窓からは、遊女が団扇片手に手招きしそうな風情がある。玄関に入ると広い土間が一部奥に続いている。正面には2階に上がる階段が、そして脇の



太いケヤキの柱に柱時計が掛けられていて、宿の風格に相応しい演出をしている。宿泊はもちろん昼食、夕食も可能。

ここは観光地化されていない本物の生活の営みを感じられる、数少ないひっそりとした城下町である。是非一度おいでいただきたい。

所在地：掛川市横須賀113
TEL 0537-48-2008

愛宕下羊羹

味は“〇〇や”以上、値段はその1/3。場所は県立横須賀高校のすぐ西側、人目に付かない裏通りにこのお店はひっそりと佇んでいる。そのロケーション・外観からしても愛宕下羊羹の品格を感じることができる。

創業1907年で100年以上の歴史を持つ羊羹だけ売っているお店です、羊羹しかありません。どっしりと構えたこの潔さは、かえって新しい商業的戦略とも感じられる。正面入って目の前の木枠のガラスケースの中に、今時めずらしい裸の短冊姿で売られている。羊羹は材料の配合と火加減で味や舌触りの良し悪しが決まると言われ、創業以来一貫した製法を守り続けているので量産はできないとのこと。



栗、小豆、白(いんげん豆)、抹茶あたりが定番。一本700~850円、口に頬張ればどれも硬めのドライな食感と上品な甘さの中に雑味が微塵もない。素朴な味わいが緑茶(掛川深蒸し茶)とよく合う。職人魂のこもった秀逸の和菓子となっている。売切れ次第閉店、ご購入の際は午前中においていただきたい。

所在地：掛川市横須賀1515-1
TEL 0537-48-2296
定休日：水曜日・第2・3・5日曜日(変更あり)
営業時間：AM9:30~売切れまで

諮る

溝口正人 | 名古屋市立大学大学院芸術工学研究科教授

私のパソコンの漢字変換ソフトウェアによれば、「諮る」とは、ある問題について他人の意見を問う、専門家などの意見を聞く、とあります。今まで取り上げてきた「はかる」が、行為を起こす主体目線の言葉であったとすれば、諮るとは、ことの妥当性をはかる。他者を意識した「はかる」であると言えます。建築行為の諸事象で「諮」ることの諸相が今回のテーマです。

禁忌(タブー)を諮る

現代でも、家相を気にされるお施主さんは多いのではないのでしょうか。なにより、フォスターが設計した香港上海銀行本店の足元がピロティーになっている理由のひとつに風水の吉凶があり、ペイが設計した中国銀行タワーの鋭角のコーナーがその香港上海銀行ビルに向けられているのは、ライバルの運気を下げるためだと噂されたり、ことの吉凶が天と地の理に基づくと考えられているアジアでは、巨匠建築家さえも、その理に従わざるを得ない。今も昔も建築行為とタブーは切り離せません。そして建築にかかわるタブーは、建物そのものの形態の議論におよぶ。香港上海銀行ビルのケースは、その最たるものといえるでしょう。日本でも、建物の形態は吉凶とは無関係ではありませんでした。

平安時代、摂関政治が頂点を迎えていた長元元年(1028)、関白藤原頼通の邸宅である高陽院を天皇の住まいとするべく改造が必要となりました。天皇に吉凶が及ぶ重大事ですから、関白自身から関係者たちに、工事の是非が諮られます。貴族、源経頼の日記『左経記』には、ことの経緯が細かく記されていて興味深い。

禁忌は「凡当梁歳正寝、正堂、上梁、豎柱、不利家長、多凶少福、財賄耗散出臨官」とのこと。つまり、梁年(天梁に相当する戊辰・戊戌の年、地梁となる庚辰・庚戌の年)における「正寝」「正堂」の工事は、家に災禍が及ぶ。いわゆる年回りが悪いというもの。もちろんこのタブーは、読んでの通り中国由来のもので、日本においてどの建物が「正寝」「正堂」に相当するのかが問題となります。そこで識者に諮ったわけ。

ところが上がってくる吉凶判断の前例は、今日では国会

議事堂に相当する大極殿の事例だったり、皇居である内裏の建物だったりして、議論はどうもかみ合わない。占い・天文・暦を所轄する陰陽寮の長官は「そもそもこのタブーは暦を司る人間が言い出したこと。陰陽道(占い)ではタブーではない。」として判断を回避する始末。識者それぞれが自身の主張を述べるだけで結論は出ない。結局、凶事を怖れてか、工事は停止となりました。

「群盲象を評す」となるか「三人寄れば文殊の知恵」となるか。中国の実態を知らない識者たちが、文言をひねくり回して議論する状況は滑稽でもあります。幅広く識者を集めた審議会であれば、議論が発散して結論が出ないのはよくある話です。

形式を諮る

一方で建物形態における日本固有の状況があったことが、この議論を複雑にしたのでした。取り上げられる大極殿と内裏(皇居)の建築様式の相違は、奈良の平城京に復元された大極殿(※図1)と京都御所の正殿である紫宸殿(※図2)とを比べれば明らかです。瓦葺きに土間床の大極殿は中国直輸入の形式、紫宸殿は檜皮葺きと高床に示されるように日本古来の形式といえる。大きな相違です。モンゴル民族の王朝である元の首都、大都の宮殿では、パオ(ゲル)が設けられていて、民族固有の建築観を示すものとして興味深いのですが、実は異なる様式の併存という点では日本の宮殿も同様であった。現代日本の住まいでも「リビング・ダイニング」には、テーブルにイスのダイニングと、こたつ机を置いた居間が同居しています。住まいに顕在化するこのような空間は、人々の奥底にある重層的な建築観を示しています。

生物とは異なって進化の系統図でうまく語ることができないのが、建築の建築たるゆえん。むしろ両義的であることこそ、建築が持つ本質的な性格でもあります。実は、その形式を諮られるのが建築家といえるのでしょう。

法を諮る

伝統の如く人々の感覚に染みこんだ建築観が建物のあり



図1 | 平城宮大極殿



図2 | 京都御所築宸殿



図3 | 関宿地藏院本堂

様に目に見えない影響を与える一方で、人為的につくられた社会制度は、建物の形態を限定します。高さ制限、斜線制限、日影規制、天空率、建築規制は時代とともに変化し、その投影としての建物の形も大きく変化してきました。頂部が斜めにカットされた建物、コーナーのギザギザ、何気ない形にも法の影響が及んでいます。

実は伝統的な美と技術の産物として見なしがちな近世以前の建築も、それぞれの時代における法の反映でもありました。特に平和が訪れて資本の蓄積が進んだ江戸時代は、建物に関する厳しい法規制が存在した時代でもあります。封建社会では序列化された身分相応が判断基準でしたから、庶民

の家はもちろんのこと、武家住宅、はては社寺仏閣まで、秩序を可視化する存在である建物の規模や意匠にさまざまな規制がかけられました。今日見る近世の建物の多くは、そのような規制に適合するのか、諮られた結果の姿でもあります。

三河東部から遠州西部にかけて分布する釜屋建てと呼ばれる民家の形式は、太平洋側を中心に分布する分棟型の形式のひとつで、新城市の望月家住宅が国重要文化財に指定されています。火を使う釜屋と居室部とを分離する分棟型は、東南アジアの島々にも存在が確認され、ヤシの実とともに黒潮によって日本列島にたどり着いた形式としてノスタルジックな文化伝播論で関係づけられるのですが、実は規制の産物と考えられています。

江戸時代では、民百姓は管理すべき対象であり、日常生活のさまざまな行為が制限されていました。贅沢の発露である居宅は、畳敷きや天井仕上げ、長押の使用、果ては開口部の大きさまでが制限の対象でした。一方で土間部分は、年貢を生み出す生業の場として規制の対象から外されます。釜屋建ては、先行する形式は土間が一体であり、時代とともに釜屋を別棟とする形に変化して成立したようです。まさに制限を逆手にとって規模拡大を図った結果というわけです。今日見る特徴的な民家の形式成立の背景には、近世特有の規制の存在が透けて見えます。

規制の対象は信仰の発露となる寺院本堂にも及びます。寛文8(1668)年、幕府から出された「寺院作事法度」では、梁行きは京間で3間まで、四方に「しころ庇」1間半までが規模の上限とされ、この制限を外観で可視化した仏堂ができあがりました。亀山市関宿の地藏院本堂(国重要文化財)は元禄13(1700)年建立ですが、屋根に段を付けた鋳(しころ)葺きで合法性を表現しています(※図3)。

諮られた結果が建築。国立代々木競技場の設計者が丹下健三に決まった経緯は、ほとんど施設特別委員会委員である岸田日出刀の独断にあったことはよく知られています。名建築に名伯楽あり。諮る側は、諮るべき謀りごととはなにか、慎重に考えるべきなのでしょう。



みぞぐち・まさと | 1960年三重県生まれ。名古屋大学卒、同大学院修了。清水建設設計本部、名古屋大学助手を経て現職。専門は日本住宅史、漢族・少数民族住居誌。文科省文化財保護審議会第二専門調査会委員、愛知県文化財保護審議会委員、重要伝統的建造物群保存地区保存審議会委員(妻籠、奈良井、足助など)。町並調査(美濃、醒井、犬山、足助、有松、揖斐川など)、近代化遺産調査(秋田、鳥取、愛知)、名古屋城本丸御殿・湖西市新居閣の復元などに従事。写真はヤオ族の子どもとともに。



ようやく暖かくなり春の兆しが見えてきたものの、名古屋ではまだコートを手放せない3月6日、7日の2日間、全国支部長会議が沖縄で行われた。沖縄は日中の気温が24℃～25℃で、もう初夏の陽気。まち中には半袖短パンの人も多く、「コートを持参しなくてよかった!」と一安心。集合場所の県議会棟近くの広場では、日曜日だからか三線(さんしん)沖縄民謡が鳴り響き、いやが上にも沖縄気分を高めてくれた。会場の沖縄建築会館のある浦添市まで、沖縄支部の皆さんの車に分乗し移動した。到着までは渋滞もあり、かなり時間がかかったように思えた。今考えれば単に土地勘がなかったからなのだろう。沖縄建築会館は県建築士会と県事務所協会の40周年事業として建設され、JIAはテナントとして入っているようだ。

早速、當間沖縄支部長の議事進行で支部長会議が始まった。関東、北陸、東海、近畿、中国、四国、九州、沖縄の8支部の支部長とオブザーバーで森副会長、山本監査が参加、沖縄からは副支部長の伊良波氏、金城氏、前田氏の3名が出席された。當間支部長の挨拶の後、沖縄支部に続いて各支部の最近の活動報告がされ協議に移った。亀谷中国支部長の活動報告で、建築家・菊竹清訓氏の代表作のひとつ出雲大社「庁の舎」の保存活用に関する話題が提供され、そのまま協議として文化的社会的に貴重な建築をどのように保存再生および活用していくかを議論することとなった。出雲大社「庁の舎」は経年劣化が激しく雨漏りもあるとのことでの取り壊しの計画があり、中国支部は出雲大社宛てに要望書を提出する準備を進めている。公共建築と違い民間の建築の保存はJIAや建築学会などが頑張っても難しく、建築が市民・地域住民にいかに関心されているかが重要であるとの意見が出た。会員の中に保存再生を訴える側と取り壊し後の設計に携わる側の両者が存在する難しさも指摘された。確かに再生・活用となると、建築家の視点も重要だが、常日頃から建築の価値がどこにあるのか広く市民に理解を求める活動が必要なのだろう。

やはり今回の議題は何と言っても、登録建築家の登録・更新状況

と今後の取り組み方である。東海支部は前日に認定評議会が開催されたので報告できたが、九州・四国以外の他支部の多くはまだ把握できていない状況だった。受けた印象としては、新規、再登録の会員数はかなり少ないようだ。また、新入会員が登録建築家になることについていろいろな意見が出た。前回の理事会における基本合意(?)が、ないがしろになってしまう恐れがあり、次の理事会で再度協議し方向性をつけることとなったので、次回の理事会レポートでお知らせできると思う。新入会員全員が登録建築家にならなければザル規程になってしまう。会員が減少することは覚悟の上で踏み切ったはずであるのに……。

時間となり会議を終了し懇親会場のある那覇市へ向かう。沖縄は昼過ぎから雨で会議中はずっと降り続けていたが、ほぼ降り止んでいて移動にはありがたかった。懇親会場の「美栄」は琉球料理を復活させるため1957年に創業した、沖縄の伝承料理を供する店だ。料理に舌鼓を打ち泡盛を適量(?)にいただき、沖縄の夜をゆったりと満喫した。

明けて7日は快晴で前日を上回る気温となり、沖縄支部の皆さんの案内で「琉球浪漫巡り」へ出発した。世界遺産「斎場御嶽(せーふあうたき)」、「中城城跡(なかぐすくじょうあと)」、「国指定重要文化財 中村家住宅」、「沖縄コンベンションセンター」を巡り帰途についた。中でも興味を引いた「中村家住宅」は、土族屋敷の形式に農家の形式である高倉・納屋・畜舎などが付随して沖縄の住宅建築の特色を全て備え持ち、東・南・西を琉球石灰岩の石垣で囲い、その内側に防風林の役割を果たす福木(ふくぎ)を植え、台風に備えている。構造材はイヌマキで、沖縄では昔はクリの木かイヌマキを使用していたそうだが。現在は九州(宮崎でプレカット)から入れるのが一般的なのだが。

資格制度について今一つ釈然としない支部長会議であったが、當間支部長を始め沖縄支部の方々には、2日間本当にお世話になりました。ありがとうございました。



手づくり感あふれるシーサー



会議の様子



集合写真(中村家住宅にて)

建築家の目線で三重を発信! 「アーキテクトみえ 26・27号」

この度、三重地域会にて会報誌「アーキテクトみえ 26・27号」を2016年3月に発行しました。これまで三重地域会では長きに渡り「建築文化講演会」、「建築ウォッチング」の開催、「アーキテクトみえ」の発行と3つの事業を主とし続けています。その一つである「アーキテクトみえ」は、他の2つの事業と基本的な目的は(会員・一般の方への情報提供と交流など)、同じではありますが、言葉や行動ではなく活字の冊子にすることで永く残していけるものであると考えています。今号では、中西地域会会長主導のもと新たに結成された新規事業委員会が、平成26(2014)年度からさまざまな企画案の検討や視察などを繰り返しながら進めてきた「建築ラリー」のレポートを掲載しています。内容は、平成28(2016)年1月23日(土)「建築家と松阪を歩こう」、1月30日(土)「建築家と四日市を歩こう」、2月6日(土)「建築文化講演会・建築シンポジウム」、2月7日(日)「建築家と伊勢を歩こう」について、企画から開催までの流れや参加者の感想などを含めたレポートと

しています。特集は「三重のまつり～地域のまつりと建築家～」を主題として、三重地域会の会員6名に個々の地元の祭りを独自の目線も含めて紹介していただいています。三重の祭りを調べていく上で皆さんが良く知っているような大きな祭りから各地で古くから行われている伝統的な祭りまで、私もはじめて知る祭りも多く驚きました。

私が三重地域会の広報委員長をお受けしてから2年が経ちました。最初は「アーキテクトみえ」の発行が2年後であることもあり、まったく企画などの作業には手を付けずその他の広報委員会の作業に時間を使っていました。年度が替わり発行まで1年となってからの時間経過は凄まじいものがあり、特集記事である「三重のまつり」についても、内容が決定したのが7月末頃でした。普通に考えてみても編集時期を除くと最低でも2月から7月までのまつりの紹介はできません。そのため今回執筆していただいた会員の皆さんにも秋から年明けまでのまつりに限定させてしまいご迷惑をお掛けしてし

まいました。「建築ラリー」のレポートについてもイベント終了から原稿締め切りまで2週間程度で執筆していただかなければなりませんでした。そんな厳しい状況の中でも祭りを選定し、素晴らしい原稿を完成させてくださった執筆者の皆さん、短い期間の中での確にレポートをまとめ執筆していただいた皆さんにはとても感謝しております。

この2年間、三重地域会では中西地域会長の基本方針である外部(一般の方・行政など)への情報発信や地域との交流を念頭に置き、全体の事業や研修会などを行ってきました。会報誌である「アーキテクトみえ」についても、外部の方々にも少しでも興味を持っていただけるような内容を考えるとともに、建築家は皆さんの住む地域に深く関わっているということをもっと知ってもらいたいという想いを込めて編集いたしました。

「アーキテクトみえ」は最初に発行してから号数で考えても27年の月日が流れています。これまで沢山の会員の方々がこの冊子の企画・編集などに携わりそのときの想いを乗せて発行してきたのだと思うと、今更ながらに責任の重大さを感じています。

最後にこの場をお借りして、「アーキテクトみえ26・27号」の発行にご協力いただきました皆さまに心より感謝申し上げます。



歴代冊子

「アーキテクトみえ 26・27号」表紙

相原宏康 | Hiro設計室
(三重地域会・広報委員長)



2015年度 「日本建築家協会優秀建築選100作品」 入選された東海支部の皆さん

尾鷲小学校



伊藤 恭行
CA n
(シーラカンズアンドアソシエイツ)

この建築は、2010年に行われたプロポーザルで選定され実現したものです。尾鷲小学校は明治9(1876)年創立の東紀州では最も古い歴史を持つ小学校です。地形的には、三方を紀伊の山々に囲まれ、東に向かってなだらかに下りながら海へと開く

尾鷲市の中心に位置しています。多くの住民が本校の卒業生であり、地域が持つ記憶を継承していく場所であるとともに、東紀州全体の学校教育の核ともなってきました。

本計画は、築50年を過ぎた木造校舎の建て替えと既存RC校舎の耐震改修です。敷地にはグラウンドに面して既存の大きな石段があり、100年以上の歴史を持つ尾鷲小学校の象徴的な場となっていました。本計画では、この石段に面して正門から既存RC校舎につながる回廊空間を設けることとしました。旧木造校舎においてもこの部分は上下足の履き替えを行う屋外廊下であり、回廊空間はその記憶をダイレクトに継承するスペースとなっています。また、この空間に面して多目的ホール、図書室を設けることで、異なる学年の子どもたちが共存する学校全体の中心となる場として計画しています。休日や夜間は、回廊空間によって接続される多目的ホール、図書室、特別教室、体育館などが地域開放の場となることが想定されており、地域コミュニティの核として使われていくことが期待されています。

風の街みやびら



宇野 亨
大同大学 / CA n
(シーラカンズアンドアソシエイツ)

このたびはJIA優秀建築100選に選ばれ、大変光栄です。この建物は、2012年に施主が主催した設計プロポーザルで選ばれた、広島県庄原市の高齢者福祉施設です。施主の要望は、利用者の家族や近隣の方が気軽に立ち寄れる、木の温かみある家のような建築でした。

その要望を実現するため、地域に開かれた遊歩道や庭をつくり、木造平屋の特別養護老人ホームとショートステイ(以下、特養)が5棟、デイサービスが2棟、本部棟が1棟という分棟形式を提案しました。施主、設計者共に経験がない分棟形式だったので、大きな模型で職員の作業動線を検討したり、入居者の車椅子動線を体感していただくようなWS形式で設計を進めました。その結果、食事の運搬は各建物の

玄関まで車で行き、介護、看護は各建物で完結させて動線を短縮する工夫をしています。また、まるで個人の家を訪問しているような建築にするため、特養の個室をふたつに分けました。この地域の農村民家に倣い、4畳半の寝室は「奥の間」、3畳の多目的室は「あだの間」と名付けました。開放的な「あだの間」は応接間や家族室、時には個室の玄関にもなります。また、家型の「奥の間」に包まれた建築は、中からも外からも小さな家が集まったまちのように映ります。一人一人の生活風景が空間を彩り、個に寄り添う介護をしたいという施主の新しい試みが、やがて普通の生活の場として、周辺環境に溶け込み、「ひとつの風景=まち」になっていくことを期待しています。

氷見市庁舎



eaves house



川本敦史・川本まゆみ
エムエーススタイル建築計画

このたびは、JIA 優秀建築100選に選定いただきましたこと大変光栄に思います。建築というひとつのモノづくりは施主との出会いから始まり、多くのつくり手と長い時間がかかり合いながらつられていきます。そして建築に必ずその

過程も表現されていきます。この賞はそのような経緯も含めて評価していただいたものと理解し、施主・関係者の皆さまに心より感謝申し上げます。

住宅を多く手掛ける私共は、施主性・持続性・場所性・空間性のすべてが連動することを意識しています。住宅という固有のものが個性を持つのは当然の中、周囲との関係性をどのように築いて展開していきけるのか、また、長い暮らしの変化にどのように対応していきけるのかといったことを建築空間に反映・表現させていくことが重要です。そして、衣食住にかかわる人間活動が継続的に行われていく原点が住宅にはあると思うからです。

本件は二面道路に接した住宅地の一角にある、夫婦と猫2匹のための住まいです。小さな敷地ゆえに、内外を規定する領域を曖昧にして人や環境を接続していきける大らかさを空間化するために、架構と開口という建築の骨格に重点を置いています。その特徴的な軒下空間やスケール感、活動性や拡張性、さらには開放感と閉鎖感を合わせ持つ多様な住まいとなっています。

住宅が社会貢献のひとつとしてそれぞれが豊かな価値観を見出せるよう、今後も設計活動を自問自答しながら進めていきたいと思っています。



降旗範行
元 山下設計中部支社

このたびは、JIA 優秀建築選にご選定いただきありがとうございます。この場を借りて関係者の皆さまに厚く御礼申し上げます。

本計画は、廃校となった高校の体育館2棟と校舎の一部を、市役所に改修した計画です。旧氷見市役所は、耐震性不足や津波被害の可能性などの防災安全上の課題や、庁舎の分散、バリアフリー非対応、駐車場不足など、市民サービスの課題を抱えていました。しかし、新築は市の財政負担が大きかったため、廃校となった県立高校の体育館と校舎を改修し、市役所として再利用することとなりました。

本計画で重視したのは、既存建物の耐荷重設定などの構造条件、高

擁壁のまちをつなぐ家



栗原健太郎・岩月美穂
studio velocity

三重県の住宅地に建つ夫婦と子ども2人のための住宅。敷地は丘陵地帯の開析（浸食）谷部に位置し、約30年ほど前に山を切り開き大規模な造成が行われた。丘陵地帯をフラットにしていく宅地開発が行われた結果、区域ごとのレ

ベル差を解消するための崖（擁壁）が発生し、「高い側のまち（塀を備えた平らな新興住宅地）」と「低い側のまち（地形が残る緩やかな坂に、塀が無く生活が庭や道に漏れ出ている昔から住んでいた家屋が並ぶまち）」に分かれ、それが人の生活動線までも区分けしてしまいコミュニティが断絶された状況にあった。

前面と背面の2面が道路に面し隣地側が畑に面するという環境でありながら、動線としては前面道路1面のみしか機能していなかったため、敷地の一部を掘削し擁壁を撤去することで、3方向へと開き、レベル差をつなぎ直した。

建築を掘削された底に建てることで、①北側隣地に配慮した高さを抑えた建ち方、②古い擁壁に対する建物荷重による側圧の無効化、③北側隣地からのプライバシーの確保—が可能になり四方に広がる環境と連続させることができた。

現場に何度も足を運んで、掘削した法面にクローバーを植えて行った。畑仕事をしているおばあちゃんと話したり、柿を貰ったりした。低い側のまちに住まわれているおじさんには、敷地が宅地になった経緯を教えてもらった。道が細く、車はほとんど通らない。おじさんの家は道の際に建ち、出窓にはかわいい盆栽を置く棚があり、長閑な小道から、おじさんが盆栽に水をあげているのが見えた。

レベルを横断して住まうこの家族の生活によって、都市的なコミュニティの断絶がゆっくりと時間をかけてつなぎ直されて行くのではないかと考えている。

天井や無柱大空間などの空間特性、深い奥行きや上部窓等による室内環境を活かし、市役所に相応しい空間とすることでした。アクセスしやすい旧体育館1階には、市民利用の多い窓口や地域協働会議室、また、耐荷重が大きい土間構造を活かし、重量倉庫を配置しました。高天井の旧体育館2階は、企画創造系執務室と議事堂とし、企画創造系執務室には、屋根の積雪荷重設定の余裕を利用し、船底型膜天井を設けています。膜天井は、上部窓の採光・通風・眺望を確保しながら、空間の気積を減らし、空調効率を上げ、北陸の厳しい冬の寒さにも耐え得る、快適な執務環境を実現しています。極力既存の状態を残すことで、改修費用を抑えながら、市民に親しまれた高校の記憶を残した市役所になったのではないかと思います。

専門家がしてきたことについて



JIA 東北支部（福島）伊達な建築研究所 田中直樹

震災から5年の月日が流れました。福島で暮らす人間として、当初はまじめに地元の電力会社でも立ち上げようかと模索したこともありましたが、日々の職務に追われ、手をこまねいている間に時は過ぎ、この4月から電力小売自由化もスタートしてしまいました。何かを成す人間と凡人との違いは、こういうときの瞬発力というか実行力の差にあるような気がつくづくしている今日この頃ですが、今回、東北からのメッセージということで、震災以降、感じてきたことを述べさせていただきます。

専門家がしてきたこと、詳しく言うと、現代の経済性を追求し分業化された各専門分野において、社会にとってよかれと思って提供されてきたものやサービスには、その目的とは裏腹に、人間が本来持ち合わせているはずの生命力を弱めたり、人間性を乏しくしたりする部分が含まれることが多いのではないかと。利便性や経済合理性を追求するあまり、本来的に大事な部分を忘れてしまっているのではないかと思うことがままあります。

例えば食品の安全性について。自分で収穫した作物は自分の責任ですが、商品として購入した食品には賞味期限の表示があります。近年、それを改ざんして販売したというニュースをよく耳にします。本来、人間は食べてよいものか悪いものかを判断する能力を十分に備えていたはずなのですが、その判断の根拠を包装紙に表示されたデジタルデータに頼る消費者が増えているようです。

例えば抗菌グッズについて。最近では、脅迫まがいの台所用洗剤のテレビCMも見受けられ、文具、家庭用品から建築仕上材まで抗菌・除菌をうたった商品があふれています。現在、こども園の設計をして

いて、嘔吐や粗相が想定される幼児のために、抗菌作用のあるこの仕上材を……と営業マンが自信满满で宣伝していきます。起源より、人類は細菌と共生しながら生命をつないできたものと思っているので、幼児期から細菌を遠ざけてしまったらその後の人生とても苦労するんじゃないかと心配してしまいます。

そして家庭のエネルギーについて。一般に電力をはじめとするエネルギーは、家庭生活の快適性を向上させるために使用されます。大げさに言えば、家族の幸せのためです。その家族とは、現在のメンバーのみを指すものではなく、子々孫々とそれを取り巻く人々をも含むものとするに異論が少なくないと思います。そのとき、コンセントの接続されている先を想像してください。われわれ世代は影響なく逃げ切れるかもしれませんが、将来世代の幸せを、現在は人として当たり前可以享受できる権利を、阻害するシステムに大方つながっているはずはです。

この件については、「自分でやれることは自分で楽しむ」をモットーに、わが家の電力自給化を計画しています。商用電力に頼ることをやめ、自前の太陽光発電パネルと蓄電池で家庭生活を成り立たせる計画です。今まで、蓄電池が高価すぎて実行できずにいましたが、昨年末の期間限定1.9%ローンにつられて、電気自動車のリチウムイオンバッテリーを確保してしまいました。雨の日続きで停電になりそうなときは、日産のお店に駆け込める保険付のシステムとなります。これは、今後過疎化が避けられない山村地域の、過疎化したって俺は住むぞという暮らしのモデルになると考えています。現在、エネルギーは対価を支払えばいくらでも使えるもの、不断

の構えで送ってくれるものという前提で家庭生活があり、この社会があります。その前提をリセットし、ある程度「自分のことは自分でやる」という感覚が広がれば、もう少しフットワークの軽い、身の丈に合った社会に近づくのではないかと思います。

世の中は、人生のかけがえのない時間を大切に過ごす目的で、それぞれの適性に依拠して分業化し、効率的な社会を目指してきたものと思います。しかし、いつの間にか社会の細分化が進み、経済性や効率化が主目的となり、本来の目的を見失うか、見えても手の届かないものになってしまっている現状にあるのではないのでしょうか。幸い建築家という職能は、その目的を明確に意識し、手段を行使できる立場にあります。建築という専門性における常識をもう一度洗い直し、本来的な社会の幸福のために、小さな努力を積み重ね、みんなの力を結集していけたらと思っています。

推薦本

『文明の災禍』
内山節著
新潮新書

破壊された
未来の時間を
取り戻すために
哲学者による
「ポスト3.11」の
決定的論考！
新潮新書

原発事故後、半年で発刊されました。混乱し、この状況をどう捉えてよいか迷いがあつたときに、JIAの先輩の勧めで手にしたことで、目の前が開けた気がしたことを覚えています。

那古野下町衆と 円頓寺・四間道界限

齋藤正吉 | 齋藤正吉建築研究所



円頓寺・四間道界限は、現在では地域住民主導のまちづくり先進事例としての認識が高まりつつあります。その活動の中心的な役割を果たしてきたのが「那古野下町衆（なごやしたまちしゅう）」（以下、那古衆）です。私もその一人として参加しています。

私が円頓寺・四間道界限とかかわり始めたのは2003年のことでした。最初は、なんとなくこの地域とかかわりを始めた私ですが、名古屋建築会議のまち歩きで出会ったもう一人の建築家と、その後活動に加わったアーティストと3人で招き猫の張りぼてをつくったりしていくうちに、商店街の人とも少しずつ顔なじみになり、「那古衆」に入ってから、さらに深く商店主達とお話しをするようになって、以来、さまざまかかわりを持ってきました。

私にとって、まちづくりについてのさまざまな制度や法律、そして助成金など行政との関係などは、全くもって馴染みのないことばかりです。先日、この界限でのイベント開催のために初めて警察へ行って道路路用の許可申請をしてきましたが、関係各部署との折衝や、助成金などの情報収集、他のまちづくり団体との連携などやるべきことは、本当に多岐に渡ることを学びました。もちろんこれらの作業は、那古衆メンバーが分担して実行するわけですが、多くの部分をメンバーの都市計画コンサルタントに頼っているのが現状です。一緒に活動していて、建築家は建築基準法や消防法だけではなく、もっといろいろな法律や制度を勉強しなければならないと実感しています。

私自身はまちづくり活動をしているという実感は全くなくて、楽しく、面白いからこの活動に参加しています。この気持ちは現在でも変わっていませんし、当初はアーケード改修事業にかかわることなど想像もしていませんでした。そして、これからも同じ気持ちで、円頓寺・四間道界限でのさまざまなことを楽しみ続けたいと思っています。

■「ナゴノダナバンク」の活動

那古野地区店舗開発協議会、通称「ナゴノダナバンク」は「那古衆」を母体とする店舗開発チームです。空き店舗と出店希望の新規テナントをマッチングします。端的に言えば「降りてしまったシャッターをなんとかこじ開ける」活動です。こうしたマッチングは空き店舗の所有者と商店街としての想い、そして出店希望者の想いが上手く一致しないと成功しません。私もメンバーに名を連ねていますが、中心的活動をしているのは、商店主でもあるもう一人の建築家です。これはデリケートな情

報を扱うという特殊な事情があるからです。この活動では、新店舗誘致よりも、つくったお店をやめさせないところに重点を置いています。そして、せっかくだから面白いお店に来て欲しいと考えています。現在までに14のお店がオープンし、5つのプロジェクトが進行中です。

■アーケードの改修

アーケード改修事業は商店街の振興組合理事長と都市計画コンサルタントと建築家、そして私の4名でアーケード対策委員会を立ち上げたのが始まりでした。折しも国の助成金が得られることになったことが追い風になり、2013年からスタートし、2015年に完成しました。この間、同委員会は商店主や近隣住民との調整、関係官庁との折衝・調整、施工業者の選定、ファサードデザインの住民参加型プロセスの実践などの役割を担ってきました。また、もう一人の建築家と協同で設計業務にも携わりました。

そして、地域主導によるアーケード改修工事の実践が評価されて2016年、愛知まちなみ建築賞を受賞致しました。これは、まさに商店街が表彰されたのだと、みんなで喜びを分かち合いました。



私自身はまちづくり活動をしているという実感は全くなくて、楽しく、面白いからこの活動に参加しています。この気持ちは現在でも変わっていませんし、当初はアーケード改修事業にかかわることなど想像もしていませんでした。そして、これからも同じ気持ちで、円頓寺・四間道界限でのさまざまなことを楽しみ続けたいと思っています。

◆私と円頓寺・四間道界限とかかわり

- ・招き猫プロジェクト（名古屋建築会議 2003年）
- ・七夕祭りへの参加
（張りぼて作り・招き猫チーム 2003年～2007年）
- ・那古野下町衆への参加（2008年～）
- ・ごえん市での広報活動（那古野下町衆）
- ・ナゴノダナバンク（那古野下町衆 2009年～）
- ・名古屋市地域まちづくり活動助成採択
（那古野下町衆 2012年～）
- ・バリ祭実行委員会（那古野下町衆）
- ・円頓寺秋のバリ祭
（バリ祭実行委員会 2013年～）
- ・アーケード対策委員会
（那古野下町衆 2013年～）
- ・アーケード改修工事（設計者としてかかわる）
- ・パッサージュ・デ・パノラマ（フランス・パリ市）と
円頓寺商店街との姉妹提携
- ・那古野小学校跡地活用ワークショップ
（那古野下町衆 2016年）



上 | 円頓寺とかかわるきっかけとなった招き猫プロジェクト
中 | 那古野下町衆
下 | アーケード改修工事

2016年度事業計画(案)および予算(案)を承認



本部理事・東海支部長 石田 壽

今回から次期理事候補者もオブザーバー出席でにぎやかな理事会となりました。

【審議事項】

1. 入退会承認の件(浅尾事務局長)

- ・新規入会希望:正会員(16名)、準会員(専門1名、ジュニア1名)、協力会員(法人6件、個人1名)
- 種別変更希望:シニア(1名)
- 退会希望:正会員14名、シニア2名、ジュニア2名、法人協力1件承認
- ・近畿支部より入会希望の梅原氏は一級取得後5年未満であるが、オランダ建築家協会登録建築家として実務歴13年で資格は担保されているとのこと。相互認証について再確認することを条件に承認。
- ・本日承認後の正会員数は3,978名

2. フェロー会員推挙承認の件(上浪総務委員会委員長)

- ・5支部から推薦のあった24名についてフェロー会員とする。承認

3. 財務・事業管理委員会・名誉会員選考委員会委員承認の件(筒井専務)

- ①財務・事業管理委員会委員承認 委員就任:當間卓(沖縄) 承認
- ②名誉会員選考委員会委員承認 委員就任:近江美郎(北陸) 承認

【報告】退任委員:島田 潤(沖縄)

4. JIA環境会議議長・委員承認の件(筒井専務)

議長:小玉(関東)

委員:堀尾(北海道)、高屋(北陸)、金城(沖縄) 承認

【報告】退任 議長:野沢(関東) 委員:小室(北海道)、袴田(関東)、青山(北陸)、菅谷(近畿)、松岡(九州)伊志嶺(沖縄)

5. 2016年度事業計画(案)および予算(案)承認の件(筒井専務)

- ・事務局より2016年度事業計画(案)および予算(案)の説明があり、3月末に内閣府へ提出すること。会費収入を純減5%で想定、公益比率は62.0%となる。承認

6. 苦情対応に関する検討結果の件

(上浪総務委員会委員長・森副会長[特別WG主査])

- ・苦情対応の案件に環境建築賞を授与したことについて、特別WGを設置し検討した。その結果「環境建築賞の取り消しには至らない」との報告があり審議となった。特別WGの検討結果を承認

7. ARCASIA大会ACA18誘致活動承認の件

(高階国際交流委員会委員)

- ・2018年のARCASIA大会を日本で開催するための誘致活動を行いたい。次の香港大会(2016年9月)にて決定されるため、7月末には誘致の申請資料を提出する必要があるとのこと。承認

【報告事項】

1. フェローシップ委員会報告(長尾フェローシップ委員会委員長)

- ・長尾委員長よりフェローシップ委員会の活動報告と方針説明。
- ・設計コンペについては、若い方が住宅以外の設計に中々携われない現況を打開したい。まちづくり会議のコンペ・プロポの行政

支援の取り組みと共同して進めて行く。

- ・ウエルカムオフィスは建築家を目指す学生を対象に、建築家が何を考え行動しているか、設計事務所がどのような業務を行っているのか、直接肌で感じる場を提供する企画である。

2. 「JIA建築家大会2016大阪」について

(松本副会長[大会実行委員長])

- ・2016年10月27日～29日に、大会テーマ「笑都物語(繋いできたもの、繋いでゆくもの)」、メイン会場を大阪市中央公会堂で開催。

3. コンペ・プロポーザル方式による選定業務支援リーフレットについて(連理事)

- ・各支部地域会が行政とのコミュニケーションをとるためのツールとして活用するもので、各支部地域会の実情に合わせて利用してほしい。

4. 国際交流活動支部事業助成方針変更の検討について

(高階国際交流委員会委員)

- ・現在年間150万円の予算で1支部15万円/年を上限としているが、半額程度未消化となっている。また実績に支部ごとのばらつきがあり、これを改善するための提案。今後意見聴取および理事会を経て総会に諮りたい。

5. 建築相談活動規程の件(上浪総務委員会委員長)

- ・各支部地域会に意見をお願いしているが、早急に意見を取りまとめ3月中に提出してほしい。

6. 香港建築家協会(HKIA)との国際交流事業について

(當間沖縄支部支部長)

- ・2015年度香港マカオ研修についての報告が當間支部長よりあった。

7. 活動及び業務執行状況報告(筒井専務理事)

- ①公共建築発注方式の多様化への対応(公共建築設計懇談会・五会研究会など)報告

- ②基礎杭問題への対応について

- ③国際交流活動について

- ④京都工芸繊維大学大学院における国際連携建築学専攻の設置に係わる意見書について

- ⑤2015年度第3四半期決算について

- ・昨年12月末までの集計で公益比率は56.3%となっている。

- ⑥2015年度決算見込み報告

- ・暫定1月末決算を元に2015年度決算見込みを予測した。収支は約208万円の黒字の見込み。

- ⑦後援名義承認の報告(会長専決事項)

理事会終了後「日本／イラン建築・都市計画国際ワークショップ in Tokyo」が開催されることと、時間の関係もあり「支部長会議in沖縄」のレポート(P6に掲載)に記した登録建築家の件が協議できませんでした。理事会後の懇親会でその件を話題にし、日を改めて協議することとしたので乞うご期待。

東海支部役員会報告

今月は7名の退会・種別変更届けが提出されました。2015年度の正会員数は、退会24名、種別変更3名と大量の減少となり、21名減で358名となりました。過去5年の平均11名減と比較すると大幅な増加で、高齢化が進む中、登録建築家制度の改革の影響もあるのではないかと思います。だからと言って登録建築家認定時におけるCPD単位取得の緩和や、日常的業務に密接するCPD単位の認定適合理化と称して、単位取得を生涯学習の対外的な証とならない制度にはしてはいけないと思いますし、正会員は全員登録建築家になる目標を決めた以上、妥協することなく実践すべきだと思います。あと1カ月で2期4年の支部幹事も任期が終わりますが、今後も支部役員会での建設的で活発な議論を期待します。



水野豊秋 | ヤスウラ設計

日時：2016年3月25日（金）16：00～18：00
場所：昭和ビル5階 JIA 東海支部事務局 会議室
出席者：支部長、本部理事1名、幹事8名、監査1名、
オブザーバー 8名+次期役員候補者4名
欠席：本部理事1名 幹事3名 監査1名

1. 支部長挨拶

久々の理事会がありました。又いよいよ次年度の新役員も出席して3月・4月と役員会も後2回となりました。審議をよろしく願います。

2. 報告事項

(1) 本部報告

- ①第232回本部理事会（3/17）（石田）
- ②第31回 フェロシップ委員会（3/3）（谷村）
 - ・フレッシュマンセミナーの開催価値を検証して今後も必要かの議論を進める必要がある。
 - ・ウェルカムオフィスは4月から登録を始める。
- ③第12回 本部広報委員会（3/16）（奥野）
 1. JIA マガジン3月4月は合併号になる。
 2. HP: 入会案内ページでの「登録建築家になる必要がある」の明記有無についてはJIA、会としての明確な方針、方法が確定した際に改めて対応する。
- ④第26回 公益事業委員会（3/17）（鈴木）

公益事業推進のための事業活動助成について

 1. 事業活動報告書はA4一枚にまとめる事。（三重の今回のように多岐にわたる場合も）
 2. 2016年度重点項目は定款の（1）及び（3）、7月（5月下旬公告）12月の2回申請。
 3. 継続事業については1年を原則とし内規的に最長で2年度4回までとする。
 4. HPに助成ページを常設で公開する。アーカイブも載せる。
 - ・会員の日常業務に密接するCPD単位の認定適合理化を要望していく
 - ・普段日常的に研鑽しているのに、なんで改めて勉強しなくてはならないのかという意見に対して、対外的に証を立てるためであるとの議論を経てCPD制度を始めたはず。日常業務に単位を認定する事は証の立て方が難しいのではないか（小田）
- ⑤本部CPD評議会（3/23）（塚本）

(2) 支部報告

- ①東海支部CPD評議会（2/26）（塚本）

②東海支部登録建築家認定評議会（3/5）（鈴木）

- ・新規申請者16名、更新申請者75名、再登録申請者15名、合計106名が審査された。
- ・3/7日時点で・静岡20名/65名・愛知135名/249名・三重21名/29名・岐阜12名/18名
- ・東海支部188名/361名で52% 全国40%。
- ③退会届：正会員「甲谷辰幸（S）」「谷口邦男（A）」「南石周作（A）」「前田佐智男（A）」「西川光弘（G）」「宮原良雄（M）」（見寺）、法人協会員「アンフィニホームズ（S）」（村松）
種別変更申込書：（シニア会員）「上村貞一郎」（見寺）

《議事》

1. 審議事項

- ①入会届：正会員「玉井秀一（A）」（水野）承認
- ②東海支部 役員選挙（岐阜地域会）について（久保田）
岐阜地域会からの幹事予定者「西川光広」氏が退会したため、選挙の日程が記された 承認
- ③事業報告「子どもの建築学校」（関口）
「シンポジウム/子ども×建築」の報告集作成の事業費の報告 承認
- ④事業報告「建築家フェスティバル」（関口）
事業費の報告、一部金額訂正の上、メールにて役員に配布・報告する。内容は承認
- ⑤後援名義使用依頼「世界劇場名古屋フォーラム2016（6/10）」（久保田）承認

2. 協議事項

- ①東海支部 2016年度通常総会議案書について（久保田）
訂正事項は4/5までに事務局に送る。
- ②アーキテクト送付先について（牧）
JIA 会長、理事、支部、県・特定行政庁・県図書館・大学・専門学校など見直して現状109カ所を125カ所とした、送料が1280円増となった、4月から送付する。
- ③支部HPの予定について（久保田）
ドメインの切り替えの関係で10月位から更新は事務局で行う予定、現在見積り中。

3. その他

- ①2016年度 東海支部役員構成について（矢田）
 - ・支部幹事長補佐及び支部統括委員長を新設します。
- ②各地域会からの名誉会員推薦について（久保田）
ありませんでした。
- ③国際交流活動支部事業助成について（石田）
事業助成の改善案に対しての意見の聴衆をしたい。
 - ・未消化予算を当該年度内の国際交流委員会の予備費として、同委員会の各種活動費として執行できるようにするのは、予算が余ったから役所の単年度会計のような遣い切りをする必要はなく、翌年に繰り越せばいいのではないか。（小田・服部・石田）
- ④「建築相談活動規程（案）」について（石田）
 - ・各支部・地域会で体制も違うからこそ、意見を3/30日までにほしい。

4. 監査意見

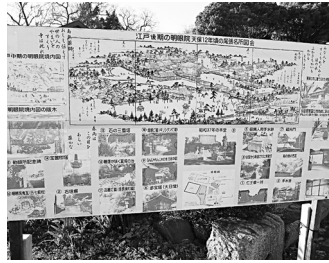
来期岐阜から支部長が出ますので御協力をよろしくお願いします。

登録有形文化財

明眼院旧多宝塔



金剛力士像



尾張名所図会



旧多宝塔



■紹介者コメント

明眼院(みょうげんいん)は大治町役場の東側にある天台宗の寺院である。日本最古の眼科専門の医療施設と知られているが、現在、医療行為はしていない。現敷地の入り口両側には赤く塗られた囲いに2体の金剛力士像(町指定文化財)が安置されている。

その入り口をくぐると看板があり、描かれている尾張名所図会を見ると、かつてはかなり広大な敷地に土塀を巡らし、本堂、多宝塔以外に方丈、客殿、書院、庫裡を中心とした居住施設群がみられる。「大治町史」によれば、延暦21(802)年に最澄の弟子である聖円が、「五台山安養寺」として開基したのが始まりと

されている。その後、眼科治療の名声が朝廷に伝わり、後水尾上皇の皇女の眼病治療にあたったことから「明眼院」の称号を与えられた由緒ある寺院のようだ。

旧多宝塔は大日如来坐像を安置することから「大日堂」とも呼ばれており、建立は寺伝によれば室町時代とされる。当初は二層構造の多宝塔であったが、濃尾地震で大きな被害を受けたのち、上層は撤去され、下層のみとなっている。その際に相輪も2つを残して撤去されたようだが、恐らく、石山寺多宝塔のように初層が方形で上層が円形で方三間の角柱でくまれ、格天井を張った様は規模も似た多宝塔の佇まいであったと想像される。

1741年に再建された本堂は伊勢湾台風で被害を受け、RC造に建て替えられ、寺院全体も荒れ果てているが、石垣、裏庭、土塀等に創建当時の面影が残っている。

所在地：愛知県海部郡大治町大字馬島字北割114
所有者：宗教法人明眼院
建築年：慶安2(1649)年/
明治中期(1883~1897年)・
昭和45(1970)年改修

構造・規模：木造平屋建て、瓦葺き、建築面積22㎡
登録番号：旧多宝塔 23-0420 (国登録有形文化財)



谷村 茂 | R&S設計工房

データ発掘 (お気に入りの歴史的環境調査)

JR武豊線



亀崎駅



ボナール型橋梁



武豊線橋梁



■発掘者コメント

明治19(1886)年に開通したJR武豊線は、愛知県下で最初の鉄道と言われています。本来の目的は、日本の幹線鉄道建設に向けて武豊港(衣浦港)から建設資材の運搬をするため、熱田までの33キロを結んだ路線です。建設は武豊から始まったため、武豊へ向かう電車が上り電車として表記されていたようです。現在は大府から武豊までの路線を言い、知多半島の通勤通学の手段として活躍しています。

見どころは、開業当初からある日本最古の駅舎、亀崎駅。木造の駅舎で切妻屋根に下屋で回廊を形成していて、ホームは当時の石積みで手仕事が見えます。次に半田駅には明治43

(1910)年完成の日本最古の路線橋があります。また、路線橋脇には明治42年完成のレンガ倉庫があります。さらに、旧武豊港内(JR武豊駅の少し南)にある貨物列車用の転車台は平成21(2009)年に登録有形文化財に指定されています。橋梁もかなり古く、元々、武豊線は幹線鉄道の建設目的の路線で、完成後は解体される予定でしたが、開通後すぐに客車の運行も認可されたこともあり、当初の木造橋梁は英国人技師の設計による鉄骨製に明治24(1891)年頃から順次替わっていきました。ボナール型の橋梁デザインの特徴はI型の桁をラダー上の横つなぎで橋梁を形成して、I型钢はリブで補強が入っています。

知多半島の人々の足として残った武豊線ですが、日本中では地域の路線の廃止が相次いでいます。人口減少の日本では、今後も減ってゆくでしょう。成長期に日本の骨格をつくってきた産業遺構らは、簡単に失われていきますが、活用方法など、残す意味を議論して、価値の多様性を見つけていきたいものです。

建設年：亀崎駅 | 明治19(1886)
半田駅路線橋 | 明治43(1910)年
文化財指定等：旧国鉄武豊港駅転車台
(登録番号 | 23-0313)



浅井裕雄 | 裕建築計画

2016年度東海支部役員選挙についての報告

2016年4月11日
東海支部選挙管理委員会委員長 福田 一豊

2016年度東海支部役員選挙について、4月8日に立候補を締め切り、4月11日に第4回選挙管理委員会を開催しました。立候補者は支部役員選出規約に定める定数と同数であり、推薦立候補届出書の記載も適正かつ被選挙人の資格を有することが確認されましたので、立候補者を当選人として確認しました。ここにご報告申し上げます。
当選人は下記の通りです。

[幹事] ●岐阜地域会
山田浩史 ヒロプランニング

Bulletin Board

今年1次審査から公開 第23回 JIA 東海学生卒業設計コンクール 2016

一次審査は6月号にて詳細掲載予定

■スケジュール

○公開最終審査×講演会×表彰式

5月28日(土)名古屋都市センター

■審査委員

審査員長:千葉 学(東京大学大学院教授・千葉学建築計画事務所)

審査員:榎戸正浩(石本建築事務所)・川本敦史(エムエースタ

イル建築計画)・塩田有紀(塩田有紀建築設計事務所)・鈴木利明

(一級建築士事務所デザイン スズキ)

■問い合わせ先

〒460-0008 名古屋市中区栄四丁目3-26 昭和ビル5階

(公社)日本建築家協会東海支部

JIA 東海学生卒業設計コンクール特別委員会事務局

TEL: 052-263-4636

東海4県につくられた住宅対象 第4回 JIA 東海住宅建築賞 2016

詳細はHPにて

■登録期間 2016年4月1日(金)~5月2日(月)

■応募期間 2016年5月2日(月)~6月1日(水)

■審査委員

審査委員長:青木 淳(青木淳建築計画事務所代表)

審査員:中村好文(レミングハウス代表)・長谷川豪(長谷川豪

建築設計事務所代表)

■スケジュール

○1次公開審査:2016年7月2日(土) 名古屋大学ES総合館ES

○2次現地審査:2016年7月30日(土)~31日(日)

○最終審査および入賞者発表:2016年7月31日(日)

■問い合わせ先

JIA 東海住宅建築賞2016 HP: <http://tokaiarchiprize.jp/>

主催:(公社)日本建築家協会東海支部事務局

〒460-0008名古屋市中区栄4-3-26 昭和ビル5F

TEL: 052-263-4636 Email: shibu@jia-tokai.org

地域会だより

<東海支部>

4/14 支部役員会(新旧)

4/16 東海学生卒業設計コンクール 1次審査

最終審査・講演会・表彰式(5/28)

5/13 支部通常総会

7/2 東海住宅建築賞 1次審査

2次現地審査(7/30~31)

最終審査・入賞者発表(7/31)

<静岡>

4/15 4月静岡地域会定例役員会の開催(新旧)

4/25 2016年度通常総会の開催。

総会后、記念講演会および懇親会を開催

<愛知>

4/1 愛知役員会(新旧)・次期事業検討会議

5/13 愛知・通常総会

6/26~27 住宅研究会 全国会議 郡山視察

<岐阜>

4/27 岐阜地域会 通常総会・懇親会開催(17:00~20:00)

場所:ホテルグランヴェール岐山

総会:5F乗鞍の間 懇親会:5F飛翔の間

<三重>

4/7 三重地域会 監査・第1回役員会

4/21 三重地域会 通常総会・講演会・懇親会(津市 東洋軒本店)

講演会:本居宣長記念館改修計画などについて

(本居宣長記念館館長 吉田悦之氏)

窓から始める快適な住まい

法人協力会通信②

<岐阜>

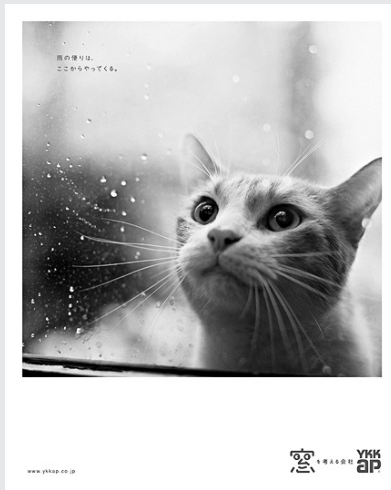
堀田 茂 | YKK AP(株) 岐阜支店 ビル建材部



私が入社した24年前、上司から聞かされた話です。わが社がアルミサッシを販売し始めた当時、現場へ行くと所長から「チャック屋が何しに来た?」と全く取り合ってもらえなかったそうです。皆さんの身の回りの「チャック」(会社から叱られてしまうので今後はファスナーとさせていただきます)を見てください。きっとYKKのロゴが入っているのではないのでしょうか? この小さなファスナー製造からYKKは始まりました。ファスナーにはなんと1200もの要素技術が詰まっています。この小さなファスナーの技術を活かしYKK APは快適な住空間を創造する「窓」や美しい都市景観をつくる「ビルのファサード」をつくる窓メーカーとなりました。

普段はあまりに身近すぎて意識することの

ない「窓」ですが、本当は実に多様で奥が深いのです。皆さんのお住まいでは、冬の寒さや結露でお困りではありませんか? 冬の家が寒いのは当たり前と思ひ込み、寒さが健康



に与える影響があまり認識されていないように思われます。部屋の中の急激な温度差はヒートショックを起こし、結露はカビやダニを発生させ、アレルギーの原因となります。窓には健康的な家づくりに欠かすことのできない役割があるのです。そんな「窓」を考える会社でありたいと思っています。

「窓から始める快適な住まい。」それは窓を通じて四季それぞれの光や風、熱や水と巧みに付き合い、自然の力を上手に利用しながら、小さなエネルギーで快適に暮らすことです。今後もYKK APは小エネ(ローエネ)な暮らしのご提案を致します。

●YKK AP(株) 岐阜支店
岐阜県岐阜市藪田南1-2-3 ラピスタワー7階
TEL 058-271-4177 FAX 058-268-0505

編集後記

●4月からの『ARCHITECT』の表紙写真が面白い。今までの表紙もJIA会員のさまざまな力作シリーズが続いてきましたが、今回のシリーズ「スケールと幻想」は、発想の転換の重要性を考えさせられます。日常家庭で使用している道具などでこんな写真が撮れるなんて今まで想像したこともありませんでした。さまざまな場面で考えが行き詰まったとき、視点を変えてみようということはありますが、スケールを変えて考えてみると、全く違うものに見えるものだとこの写真が教えてくれています。柔軟な発想が必要なのだと気づきました。今年の表紙写真は、2年間編集委員長を務めてこられた牧さんが提供されています。2年前に『ARCHITECT』表紙のデザインを大幅に変更しようという提案があり、委員長時代に

試行錯誤の連続でご苦労されたので、今年は大いに楽しんで素敵な表紙写真を提供していただきたいと思います。楽しみにしています。2年間の委員長お疲れ様でした。

(川本直義)

●齋藤正吉氏による「那古野下町衆と円頓寺・四間道界限」の記事を特に興味深く、そして建築家なるものの職能の理想的なあり様を感じ、僅かな羨望を持って読ませていただいた。円頓寺商店街の最盛期がいつ頃だったのか詳しくないが、景運橋から五条橋を渡り円頓寺商店街を抜けて名古屋駅までの商店街がにぎやかだったころの記憶が忘れ難い光景として残っている。都市の生活と日常の時間が入り混じった商店の多様さ、人間の猥雑な情念までも許容するまちの雰囲気や商店街に面して寺や神社のあるゆとりの空間が独特の魅力を形成していた。こうしたかつての商店街の多くがさびれてしまったとの噂を聞いて久しい。そこ

に息づいていたにぎわいの核の甦生を思うとき、一番肝心なものが齋藤さんの言葉の行間から読みとれる不思議なゆとりの中にひそんでいるように思われた。(今井裕夫)

ARCHITECT

第332号

発行日 2016.5.1 (毎月1回発行)

定価 380円(税込み)

発行責任者 石田 壽

編集責任者 牧ヒデアキ

編集 東海支部会報委員会
愛知地域会ブリテン委員会
建築ジャーナル内
ARCHITECT 編集部

名古屋市東区泉 1-1-31 吉泉ビル 703

TEL (052) 971-7479 FAX 951-3130

発行所 (公社)日本建築家協会東海支部

名古屋市中区栄 4-3-26 昭和ビル

TEL (052) 263-4636 FAX 251-8495

E-Mail : shibu@jia-tokai.org

http://www.jia-tokai.org/